参考資料3

第 33 回　石西礁湖自然再生協議会　議事概要

日時：令和 6 年 2 月 16 日（金）　15：00～17：00
場所：沖縄県八重山合同庁舎 2 階大会議室（web 併用）
Web 会場は WebEx によるウェブ会議システム

■出席者
委　員　　：個人 12 名、団体・法人 17 団体、行政 10 団体
計 39 団体

傍　聴　者：2 名（記者 1 名を含む）

■議事次第
1. 開会

2. 新規参加委員の承認

3. 報告
（1）各部会およびワーキンググループの開催報告
1）部会の開催報告
2）ワーキンググループの開催報告
（2）委員の取組報告
1）環境省事業の実施状況について
2）沖縄県事業の実施状況について

4. 議題
（1）「石西礁湖自然再生全体構想行動計画 2019-2023」見直しについて

5. その他

6. 閉会

■議事概要
2. 新規参加委員の承認

出席委員の過半数の賛成により新たに委員となった。

3. 報告

（1）各部会およびワーキンググループの開催報告

1）部会の開催報告

＜学術調査部会（中村部会長）＞

・第 8 回部会を 12 月 15 日に開催した。参加者は 26 名であった。

・12 月 8 日に開催された作業チームの報告を行った。作業チームは 13 名が参加し、サンゴの白化対策に高水温の予測を活用する可能性について沖縄気象台から話題提供いただいた。

・環境省の石西礁湖サンゴ群集修復事業で造成したサンゴ供給拠点におけるサンゴ白化時の緊急対策などについて議論した。

・行動計画の見直しについて、スローガン、未来の石西礁湖のイメージ、短期目標、重点項目などについて議論した。重点項目の持続可能な観光の推進に関しては、マリンレジャー事業者の方々も含め全体で底上げしていくことが最重要だという意見があった。普及啓発推進については、陸と海のつながりを含め重視していくべきだという意見があった。

＜海域・陸域対策部会（吉田部会長）＞

・第 8 回部会を 12 月 21 日に開催した。参加者は 21 名であった。

・陸域負荷対策ワーキンググループの進捗状況について報告があった。礁池で枝状のミドリイシ類が回復しないことについて栄養塩の影響があるのではと感じていたが、最近の研究で解明されていく様子がわかった。これからの報告も期待したい。

・行動計画の見直しについて、資料にあるような活発な質疑応答、意見交換が行われた。

＜普及啓発・適正利用部会（大堀部会長）＞

・第 8 回部会を 12 月 22 日に開催した。参加者は 25 名であった。

・石垣市が行っているサンゴ礁保全の普及啓発業務での大規模校でのサンゴ学習実施、石西礁湖飾り文字コンテストの結果、人材育成などの報告があった。飾り文字は 97 点の応募があり、八重山商工高校 2 年の飯田来実さんが最多得票で表彰された。作品はデジタルデータ化され、わくわくサンゴ石垣島ホームページからフリー素材としてダウンロードできる。ぜひ活用してほしい。

・八重山ローカル SDGs 推進協議会の藤本委員から第 3 回やいま SDGs シンポジウムの報告があった。1850 人以上の参加があったということだった。

・行動計画の見直しでは、サンゴを取り巻く状況について意見があった。重点項目では、

持続可能な観光の推進について、子どもたちだけでなく観光利用者を対象にすることも重要であるとか、西表のエコツーリズム全体構想を参考にしてはという意見があった。普及啓発の推進については、赤土問題なども最終的にサンゴを守るということでサンゴ学習に入るのではないか、環境教育は教員も対象にしてほしいなどの意見があった。

2）ワーキンググループの開催報告

＜漁場再生ワーキンググループ（岡田委員）＞

・今年度の第 3 回 WG を 10 月 18 日に開催し、サンゴ増加による漁場再生の期待される機能は、サンゴの種類や魚類によってが異なるということを関係者で議論を行い、共有認識を高めて、整理した。

・漁場再生にあたり必要とされるサンゴの再生面積についても議論を開始した。

＜陸と海のつながりワーキンググループ（安元純委員、宮本善和委員＞

【安元委員】

・第 2 回 WG を 1 月 31 日に実施した。参加者は 31 名であった。

・今年までの蓄積型栄養塩の調査状況、今年の調査計画、来年度以降の調査計画案を報告した。また、鳥取大学の宮本先生から環境省グリーンワーカー事業の進捗報告があった。その他、石垣市サンゴ保全部局連携チーム、サンゴ保全ミーティングの活動報告が行われた。

・これまで（仮称）陸域負荷対策ワーキンググループとして活動してきたが、名称を議論し、「陸と海のつながりワーキンググループ」とすることが決定した。

・石西礁湖の蓄積型リンについて、環境省事業で行われている海域での測定結果、蓄積リンの値がほとんどのサンゴ属の被度に負の影響を与えることなどが明らかになった。また、サンゴの白化と蓄積リン、藻類と蓄積リンについて関係性が見られている。陸と海域を統合した陸域負荷物質の 3 次元の水・物質循環シミュレーションモデルを構築していく予定である。

【宮本委員】

・サンゴ生息へのリン酸の影響の低減に向けたリンの域内循環に関する調査・分析として、畜産農家の牛糞処理が不十分な構造への対策、堆肥利用促進の方策を検討整理し、施策マップを作成した。

・牛糞の回収の向上、堆肥化の支援、マーケットの拡大、農家の SDGs、堆肥活用の支援ということをやっていき、考えられる施策、できる施策から予防原則に基づいて進めていくのがよい。

（2）委員の取組報告

1）環境省事業の実施状況について

【山本委員】

・環境省では行動計画に基づき取組を行っている。本日は石西礁湖サンゴ群集モニタリング、サンゴ群集修復事業について報告する。そのほか、オニヒトデモニタリング、稚人でモニタリング、海岸清掃、普及啓発として小浜小中学校や八島小学校でのサンゴ学習、海の自然教室としてシュノーケル教室などを開催している。

【(株）いであ 石森氏】（石西礁湖サンゴ群集モニタリング結果について）

・モニタリングブイの水温は、規模な白化があった 2016 年や 2022 年に比べて水温 31℃以上の日数が少なく、水温 30℃以上も減少した。

・スポットチェック調査では、2022 年は大規模な白化があり、被度が低下していたが、2023 年は減少が止まり、微増となった。

・その他、ポイント法、コドラート法、クシハダミドリイシ調査、定着量調査、1 年生稚サンゴ調査などについて報告があった。

【(一財）沖縄県環境科学センター 岡田氏】（石西礁湖サンゴ群集修復試験について）

・大規模な白化現象が繰り返し起きても、サンゴの回復力が低下しない状態を目指し各種試験を実施している。

・生産したヤングミドリイシ種苗の着生維持率は 6 ヶ月後で平均 30%程度、1 年後は減少するが 30%を維持している地点もあった。

・異常高水温時の対策として、水槽で水温を上げて行った遮光試験では、1 ヶ月程度の遮光効果を確認した。また、海域での高水温回避場所として、2022 年度の高水温期に 1～2℃水温が低い場所が見つかっている。

2）沖縄県事業の実施状況について

・沖縄県自然保護課が欠席のため、事務局より代理報告があった。

・「サンゴ礁保全再生活動促進事業」は、オーバーツーリズムによる影響について情報整理、調査、普及啓発を行う事業であり、令和 5～7 年度に実施する。具体的な内容は、下記の 4 項目である。

1)観光・レジャーによるサンゴへの影響の整理とアンカリングによるサンゴ損傷事例の把握

2)係留ブイ設置・運用のモデル事業

3)日焼け止めクリームの化学物質によるサンゴへの影響の把握

4)観光客やレジャー事業者向けの普及啓発

・「サンゴ礁保全・再生総合対策事業（オニヒトデ対策）」では、令和 8 年度までの予定で稚ヒトデモニタリングの普及とオニヒトデ大量発生に関わる情報の集約や大量発生予察時の体制の構築を実施している。恩納村での稚ヒトデモニタリングでは、2013 年から稚ヒトデの個体数とオニヒトデの駆除個体数は同じように減少しており、相関が強いという結果が出ている。オニヒトデ大量発生を予測する体制の構築では、トレーニング事業で稚ヒトデモニタリングをできる人たちを増やして、モニタリングの普及を図ることとしている。

4. 議題

（1）「石西礁湖自然再生全体構想行動計画 2019-2023」見直しについて

・事務局より、第 8 回部会後の主な修正点（石西礁湖の現状についての文言の修正、短期目標の位置づけ、これまでの取組状況、今後の課題、スローガン、重点項目等）について説明があった。

・質疑では、陸域と海域のつながりについて言及すべきであるという意見、重点項目の成果指標に関する提案、海外との連携の記載に関する提案などがあった。

・今後のプロセスとして、今回出た意見への対応を検討し、事務局と相談しつつ、会長、副会長、部会長の相談の上で最終的に決定することが承認された。

以上